

指示詞コソアの構造：直示から照応へ

豊川, 典子
九州大学大学院文学研究科：博士課程

菅, 豊彦
九州大学人文科学研究院

<https://doi.org/10.15017/7151992>

出版情報：言語科学. 36, pp.83-97, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



指示詞コソアの構造 —直示から照応へ—

豊川典子¹・菅豊彦²

0. はじめに

世界の個別的対象を指示する表現として、固有名、人称代名詞、指示代名詞、確定記述句などが挙げられるが、日本語でとくに考察の中心とされ、大きな展開を見せているのは指示代名詞コソアである。本論文では、まずこの半世紀のコソア研究の論点を簡単に要約し、それに基づいて、われわれの研究の方向を、提案というかたちで提示してみたい。

現代日本語における本格的なコソア研究は、佐久間 (1951)によって開始されるが、佐久間はそれまで主流であった、話し手からの距離によってコソアを区別する「距離区分説」ではなく、話し手（一人称）と聞き手（二人称）とそれ以外（三人称）にコソアを配分する「人称区分説」を採ることによって、その後の研究史を方向付けた。しかし、続く三上 (1970)は、「人称区分説」だけでなく「距離区分説」の洞察をも織り込んで、deictic な指示と anaphoric な指示の双方をおさめる体系的理論を提示している。さらに久野 (1973)は、三上の anaphora の議論の不備を指摘し、話し手と聞き手の知識を導入することによって、ソとアとの区別をより明確なものにしようとする。久野はこれにより「人称区分説」をより強力なものにしたといえる。われわれは本論文、第 1 節「人称区分説の系譜」で、とくにこの三上、久野の議論の要点を取り出すことにしたい。

ところで、黒田 (1979)は、この久野の anaphora についての「人称区分説」が指示詞に関する意味論と語用論の混同に根ざしているとして、聞き手の知を前提しない「独我論的」用法のうちにア系列の意味の核心部分が存在することを指摘する。われわれは、久野の anaphora についての「人称区分説」に対する黒田の批判は、久野の論点を活かしながらその行き過ぎを是正する、積極的な論点を含んでいると考える。これは、佐久間—三上—久野へと受け継がれ、展開されていった「人称区分説」への批判であり、方法論的に大きな方向転換であると見なすことができよう。

この黒田の線を受け継ぎつつも独自の展開を見せているのが、最近の Hoji, Ueyama の、ソ系列に関する研究 (Hoji at al. (2000a,b), Ueyama (1998)) である。彼らは、黒田がアとソに関して意味論と語用論を区別しようとしたのに対して、ソの持つ統語論的ふるまいに着目して、そこに指示詞の基礎構造 ‘formal properties’ があるとし、「人称区分説」が出発点

¹ 九州大学大学院文学研究科博士課程 2 年

² 九州大学人文科学研究院

とする deictic use は派生的・合成的なものであると主張する。われわれは本論文、第2節「人称区分説批判」で、黒田、Hoji らの論点を取り上げることにする。

さて、われわれは、(イ) 三上の anaphora の議論に対する久野の批判、さらに、(ロ) 久野の「聞き手の知」を退け、アを話し手の直接知のみと関係付けた黒田の試みは、anaphora の機能をより明確にしていって考えている。したがって、この久野、黒田の anaphora の議論を受け入れたい。また、(ハ) 「どの自動車会社も{そのの/*この/*あそのの}子会社を推薦した」のような、ソによる「連動 (covariant) 読み」、つまりソは変項を指示し得るという Hoji, Ueyama の考察が日本語指示詞の研究に大きな刺激を与えたことも認める。

しかし、この Hoji たちの議論に対してはいくつかの疑問を持っている。もちろん、言うまでもなく、Hoji, Ueyama 及びここ数年彼らと共に仕事をしている田窪、金水は、日本語指示詞について最先端をいく研究者である。したがって、「シェイクスピアについてドクター・ジョンソンと意見を異にすることは危険である」という言葉があるように、指示詞について彼らと意見を異にすることも、やはり危険であるかもしれない。だが、本論文第3節「提案」において、あえて彼らの研究に対する疑念を示し、それを通してわれわれの立場をできるだけ明確に示すことを試みたい。そこで示すわれわれの立場とは、基本的に、指示の問題を言語行為及び語用論の問題として認識し、指示詞の基本構造を説明する理論として三上の説を擁護するというものである。この立場をもって今後のわれわれの研究を方向づけたいと考える。

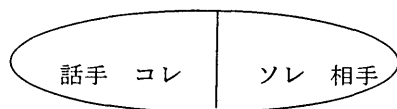
1. 人称区分説の系譜

1.1. 三上 (1970) —楕円的対立 (コレ対ソレ) と円的対立 (コレ対アレ) —

三上は、「人称区分説」において区別されていなかった「直接指示 (deictic)」と「文脈承前 (anaphoric)」という区別を導入し、「人称区分説」だけでなく「距離区分説」も取りこんで、一貫した指示詞の体系を打ちたてた。

三上は、直接指示用法におけるコレ・ソレ・アレは、「同一平面を同時的に分割」する triplet な対立ではなく、①コレ対ソレ、と②コレ対アレ、からなる「異質的」な double binary の対立であると主張した。三上によれば、①のコレ対ソレは楕円的対立、すなわち「相手と話し手の原始的な対立」をなしており、この段階ではアレはまだあらわれてこない。したがって、この①は、「人称区分説」に相当すると見ることができる。一方、②のコレ対アレは円的対立、すなわち、相手と話し手が「肩を並べ…『我々』として『ぐる』」になっていて、「相手自身は消えることはないが、『ソレ』の領分は没収」されてしまう。よって、この②は、「距離区分説」に相当すると見ることができる。

①楕円の対立



②円の対立



さらに三上は、コレ・ソレ・アレのうち、ソレ系列だけが文脈承前用法を持っている、と結論している。三上によれば、コレは「事物を会話の場面へ引入れての指示…つまり deictic」であり、アレも「いつも deictic であって」、眼前指示に限らず、「文脈によっても、両者[=話手・相手]共通の遠方（時間的・空間的）が形成され」さえすればよい。一方、ソレは、（アレのように）「文脈中にあらわれる事物が両者に共通な遠方にあるのでもなく」、また（コレのように）「話手がそれを場面に引入れるという特志を持つのではないとき」、「それを中立的に受け」、anaphoric になるのである。つまり、直接指示用法における②のアレ対コレの対立で領域を没収されたソレ系列が、文脈承前の役割を担うと考えたのである。これにより、「ソシテ」、「ソレガ」、などのように、「ソレ系列だけに形式化が起こって「意味が中性化」するという現象も説明しようとした。

1.2. 久野 (1973) —文脈指示 (anaphoric) 用法の展開—

さて久野は、三上の anaphora の用法を問題にする。三上は、ア系列に関して一見文脈指示に思われるような場合であっても、「[話手・相手]両者に共通な遠方（空間的・時間的）の事物を指す」と説明すれば事足りるとし、ア系列はつねに deictic であると一般化して考えたが、久野は、「この generalization からア系列の文脈指示用法を全て予想することは困難」であり、「何を称して、話し手、聞き手に共通の遠方と呼び得るか、は…判断できない」と反論する。³ そして、文脈指示用法におけるコアソの使い分けを、話し手と聞き手の知識状態を通して説明しようとした。

- (1) A : 僕の友達に山田という人がいるんですが、この男はなかなかの理論家で…
 B : ああ、{その／あの／*この}人なら、僕も知っていますよ。{あの／*その／

³ これに関し、たとえば、「聞き手も話し手も 1960 年にはもう生まれていたというだけの理由で、1960 年を『アノ年』とは呼べないこと、むしろ、「一緒に学校に通っていたとか、同じ下宿に住んでいたとか」といった「二人に共通の経験」がない限りア系列を使うことはできない、ということ指摘している。それで、話し手・聞き手の共通知識こそが、ア系列の文脈指示用法を規定するものであると主張するに至ったわけである。したがって、久野は、三上のようにア系列に対して「つねに deictic である」という強い特徴づけをするのではなく、ア系列に対しても文脈指示用法があることを認めていたことになる。

*この}人は随分議論好きですね。

- (2) A: 昨日山田さんという人に会いました。{その/*あの}人、道に迷っていたので、
助けてあげました。
B: {その/*あの}人、ひげをはやした中年の人でしょう？
- (3) A: 昨日、山田さんにはじめて会いました。{あの/*その}人随分変わった人です
ね。
B: {あの/*その}人は変人ですよ。

コ系列：あたかも、その事物が、目前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられ…依然として、眼前指示代名詞的色彩が強(く)…話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない (1A)

ソ系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる ((1B), (2A), (2B))

ア系列：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる ((1B), (3))

「よく知っている」とは：

- ①ある人物に対する間接的な知識はこれに属さない。
- ②直接的な知識が必要。
- ③ただし話し手も聞き手もよく知っている有名人は、たとえ面識（直接的な知識）がない場合でも、これに含める。

2. 人称区分説批判

2.1. 黒田 (1979) — 「聞き手の知」の消去・直接知を指すアの機能—

黒田によれば、久野の anaphora に関する規定の中にあらわれる「聞き手の知識」という概念は、コトバの意味論に関わるというよりも、語用論にすでにコミットしてしまっている。しかし、我々がまず見極めなければならないのは、そのコトバの「本来の用法」なのであって、やはり、意味論と語用論とは区別して分析に取り組まなければならない。この要求を満たすために、黒田は、聞き手の知の「介入する余地」がない「独り言」に注目し、話し手の知識状態だけで指示詞の選択が規定される、ということを示していく。

まず黒田は、直示用法を表すのに、「独立的用法」というきわめて広義の用語を使ってい

る。なぜなら、「眼前にない対象に関連して」も、指示詞を直示的に使えるという立場を取るからである。

そして、照応用法に関しては、独り言で使える例として、以下を挙げている。(ただし、「コ」を用いた例はない。)

- (4) 山田さんは田中先生とかいう人のことばかり話していたけれど、その人はそんなに偉い人なのだろうか。
- (5) 今日山田さんに会ったけど、あの人と会ったのは一体何年ぶりのことだろう。

また、照応用法の対話における例としては、以下を挙げている。

- (6) 今日神田で火事があったよ。{あの/*その}火事のことだから、人が何人も死んだと思うよ。

久野は「文脈指示」用法におけるソの規定に聞き手の知識の状態を含めていた。しかし、独り言である(4)の「照応用法」においては、もはや「聞き手の知識」の介入する余地はない。にもかかわらずソが使えるとすると、久野のような規定ではまずいことになる。さらに久野は、「文脈指示」用法におけるアの規定として、「指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる」としていたが、(5)のように独り言でアを用いることができるかすると、やはり久野の規定は不十分であると言わざるを得ない。しかも、(6)では、話し手は火事のことをよく知っており、聞き手はよく知らないので、久野の一般化では、ソが予測されるが、事実は逆で、アが適切となっている。「『あの火事のことだから』という言外には、『神田の火事』という概念だけからでは知り得ない話し手の直接的知識に基づいて、話し手が『人が死んだだろう』という推定を下しているという意が含まれるからである。「その火事」というと、概念的な知識しか呈示されないため、「人が何人も死んだ」ことの根拠とはなりえず、ソが不適切となる。つまり、話し手の直接的知識のみでアとソの使い分けを説明できるのである。たしかにこの対話例で、聞き手は存在していても、聞き手の知識は問題とはなっていない。指示対象が話し手にとって「直接的知識」であるのか「概念的知識」であるのか、がアとソを分ける主要な要因であることがわかる。⁴

したがって黒田は、「聞き手」という notion を退けて、以下のような一般化を行う。

ア系列：直接的知識対象を指示するのに使われる

ソ系列：概念的知識の対象を指示するのに使われる

⁴ しかしながら、アを使うためには「直接的な知識がなくてはならない」という洞察は、もともとは久野の指摘によるものであるため、この点で黒田は久野に負うところが大きいといえる。

2.2. Hoji et al. (2000b) — 「連動 (covariant) 読み」を許すソの機能—

Hoji たちは、黒田のアとソに関する洞察と、Ueyama (1998)のアとソに関する統語論的理論を土台にして、これらをコ系列へと拡張し、指示詞全体における deictic use と non-deictic use を統一的な原理のもとで説明しようと試みている。彼らの理論はきわめて複雑であり、以下においては、主としてソに関する彼らの基本思想しか紹介できないが、まずはその紹介をおこない、第3節でわれわれが提示する、Hoji たちの基本思想に対する疑問へとつなげることにしたい。

さて彼らは、指示詞を使用することのできる context を、対象が目に見える (visible) か目に見えない (visible でない) か、の二つに分け、それぞれの context における指示詞の用法を deictic use / non-deictic use と呼び、後者を anaphoric use とは呼んでいない。

- (7) a. **deictic use:** refer されている対象が発話現場において visible
 b. **non-deictic use:** refer されている対象が発話現場において visible でない

そして彼らの基本的立場は、指示詞の ‘fundamental properties’ を反映しているのは non-deictic use における ‘formal properties’ であり、deictic use における指示詞のはたらきは、‘formal properties’ と pragmatic consideration の interaction によって出てくる派生的なものであるというものである。⁵

それでは、この肝心な ‘formal properties’ はどのように規定されるのであろうか。まず、彼らが拠り所とする Ueyama は、英語の例文から以下の3つのタイプの individual-denoting NP があることを assume する。

- (8) a. D-indexed NPs (**John**_{D,3} came.)
 b. 0-indexed NPs (Every student likes **his** camera.)
 c. I-indexed NPs ([Every linguist]_{I,5} insisted that John had demanded a special evaluation of [**that linguist**]_{I,5}.)

D-indexed NP((8a)の John_{D,3})とは “referential” であり、話し手に直接経験によって知られている specific individual と結びつけて理解される NP のことである。

それに対して、0-indexed NP((8b)の his)とは束縛変項 (bound variable) として解釈され、FD (formal dependency) にならなければならない種類の NP のことである。ただし FD とは、

⁵ この点は、黒田の態度—「語用論」的要素を取り除こうとした態度—を、彼らなりに引き継いだことを示している。黒田が独り言に注目したのは、「聞き手の知」といった「語用論」的要素を取り除いて、「意味論」的な考察をしたいと考えたからであったが、Hoji たちも純粋に「統語論」的な議論をするために、「語用論」的要素のかかわる deictic use を括弧に入れたのである。

先行詞 α が dependent term である β を LF で c-command しているときにしか成立しない依存関係のことである。さらに、同一文中の 2 つの NP (先行詞 α と dependent term である β) が同じ番号の I-indexed NP (co-I-indexed NP) である場合、 β ((8c)の[that linguist]_{1,5})は自由変項 (free variable) として解釈され、ID (indexical dependency) が形成される。ただし ID とは、先行詞 α が dependent term である β に PF で先行しているときにしか成立しない依存関係のことである。したがって D-indexed NP は linguistic antecedent を要求しないが、D 以外、すなわち 0-indexed NP と I-indexed NP は常に linguistic antecedent を要求することになる。

Hoji たちは、上の D-index に関する議論を日本語指示詞すべてにあてはめ、彼らにより基礎的と考える non-deictic use の特徴づけとして、以下のような一般化を試みている。

- (9) a. コ-NP は D-index を持っていないなければならない
 b. ソ-NP は (少なくとも対象がその現場で visible でないなら) D-index を持てない
 c. ア-NP は D-index を持っていないなければならない

すなわち、ア系列とコ系列は先行詞を持つ必要がないという観察から、アとコは D-index を持つべきものであり(=9a,c), ソ系列は常に先行詞を必要とするという観察から、ソは (少なくとも対象が visible でない non-deictic use においては) D-index を持つことのできないもの (=9b))だということである。そして統語論を中心に据えている彼らにとっては、D-index 以外の index を持つソ系列こそが格好の材料となる。なぜなら、D-index は直接 deixis にかかわるものであり、したがって、彼らの言うところの「語用論」的要因が入ってきてしまうが、ソが持つ 0-index あるいは I-index は、「語用論」の要因とは一切無関係な、純粋に「統語論」的な議論と関わっているからである。

さて、そのソ系列の特性を顕著に示す例として彼らが重視するのは、以下のような「連動 (covariant) 読み」である。

- (10) a. トヨタさえが[そこ/*あそこ]の子会社]を推薦した。
 b. トヨタさえが[CPCIA が[そこ/*ここ]を調べていると]発表した。
 (11) a. どの自動車会社が[その/*あの]自動車会社の子会社]を推薦したの？
 b. どの自動車会社も[その/*この]自動車会社の子会社]を推薦した
 c. [本を開いた人]は皆[それ/*あれ]を買わなければならない。

アとコが D-index を持っている、ということから、(10)(11)に見る通り、covariant 解釈ができない、ということが説明される。D-index の付された対象は固定的であるために、このような解釈が不可能となるのである。一方、ソ系列は D-index を持てない、すなわち 0-index か I-index を持つため covariant 解釈ができる。(10)は FD の例であるから、この場合のソは

0-index を持っていることになり、(11)は ID の例であるから、ソは I-index を持っていることになる。

ところで彼らは、deictic use の分析に関しては、久野と同様、「目に見える」用法しか認めない。そして、deictic use には、(9)のような ‘formal properties’ のほかに「語用論」的な要因が関わっている、と考えている。たとえば、コとアはともに、D-index を持つべきものという ‘formal properties’ が与えられていたが、同じ D-index を持つコとアを分ける動機について、彼らは次のように述べる。

- (12) コとアの形態的な区別は、cognitive な (Grammar 外の) 区別に対応している。コ-NP は linguistically に、[Proximal]とマークされ、ア-NP は[Distal]とマークされる。そしてこれらはそれぞれ、話し手が *proximal* または *distal* と解釈しているものに対応する。

つまり、deictic use においては、Grammar 外の、語用論的な要因—物理的な距離、話し手の知識、対象の顕著さなど—によってコとアを使い分けているというのである。

そして、deictic use のコとアの規定を、聞き手に言及せずに、以下のように行っている。

- (13) a. コ-NP は話し手が *proximal* と解釈しているものを refer するのに使われる
b. ア-NP は話し手が *distal* と解釈しているものを refer するのに使われる

彼らは、上の規定から、non-deictic use におけるコとアの選択も説明していく。

- (14) a. (状況：10年前の大使館爆破計画の失敗の後、反政府ゲリラのグループはすっかり弱り果て、ついに組織を解散することを決定した。最後の会議では、リーダーを除いて、だれも何も言い出そうとしない：)
[{\#こ／あ／*そ}の計画を最初に考え出した者]が 10年前の大使館爆破計画の実行責任者になるべきだった。
b. (状況：反政府ゲリラのグループは、10年前に、大使館爆破計画に失敗した。彼らは、大使館の内部の地図をいまだに壁に貼っている。ある日残りのメンバーたちは黙ってその地図を見つめている。誰かが突然ぼやく：)
[{\こ／#あ／*そ}の計画を最初に考え出した者]が 10年前の大使館爆破計画の実行責任者になるべきだった。

上の例で、話し手が大使館爆破計画を *distal* と感じていれば(14a)のようにアが選ばれ、*proximal* と感じていれば(14b)のようにコが選ばれる、というのである。それで彼らは、*distal/proximal* の区別による説明は、deictic use にも non-deictic use にも統一的に当てはめられる、と主張する。

3. 提案

「はじめに」でも述べた通り、われわれは、(イ) 三上の *anaphora* の議論に対する久野の批判、さらに、(ロ) 久野の「聞き手の知」を退け、アを話し手の直接知のみと関係付けた黒田の試みは、*anaphora* の機能をより明確にしていって考えている。

しかし、われわれは、指示詞の基本構造を説明する理論として三上の説を擁護したいと考えており、Hoji たちの基本思想には疑問を持っている。そこで本節ではまず、3.1.で Hoji たちの基本思想に対する批判を試み、次いで3.2.で、われわれの見解を示すことにしたい。

3.1. Hoji et al. の基本思想に対する批判

以下において、Hoji たちの基本思想に対する二つの疑問を提示する。だがその前に、三上、久野、黒田の議論が容易に理解できるものであるのに対して、Hoji たちの議論はきわめて緊密に抽象的に構築されているため、われわれにとってそれを正しく理解するのはきわめて難解である、ということをおおむね断っておく。

(一) 三上は *anaphora* の用法を持つものとしてソしか認めず、話し手と聞き手が対立する「楕円の対立 (コレ対ソレ)」が、話し手と聞き手が視点を同じくする「円の対立 (コレ対アレ)」に転換した場合、前者にはあらわれていたソが領域を没収され、もっぱら *anaphora* の役割を担うことになる、と指摘した。しかし久野は、この三上の *anaphora* の説明は不十分であるとして「聞き手の知識」という概念を導入し、コソアすべてに *anaphora* の機能を認め、その上でアとソの相違を示そうとする。これに対して今度は黒田が、「聞き手の知識」を「概念的知識」に置き換え、聞き手を消去することによってアとソを説明することにより、語用論と意味論を区分けしていく。

そして Hoji たちは、「アは直接的知識を指示する」という黒田の論点を採用し、「直接的知識」を「D-index」という呼び名で表現した。しかし、より重要なのは、彼らの方法論である。黒田が語用論と(コトバの「本来の用法」としての)意味論とを区別しようとしたのに対して、Hoji たちはさらにすすんで、アとコに「D-index」を与え、ソは「D-index」を持ち得ないものとして提示することにより、コソアの統語論を規定しようとしているのである。換言すれば、黒田がアに対しておこなった洞察をコまで拡張し、統語論的区別、すなわち ‘formal properties’ の区別を提示するのである。この Hoji たちの見解は、かたちの上では、ソにしか *anaphora* を認めない三上説と類似しているが、しかし、その思考方法は全く逆である。人称区分説をとる三上にとって *anaphora* のソは派生的に規定されるのに対し、生成文法を重要視する Hoji たちにとっては、「D-index を持たざるを得ないか、持ち得ないか」という統語論的区別こそが日本語指示詞コソアのもっとも基底的な特性であって、そ

の上に黒田の言う意味論が加わり、さらに語用論が付加されていくのである。

以上のように解釈するならば、彼らの基本的な idea は了解することができるように思われる。しかし問題は、「アとコは D-index を持たざるを得ないが、ソは D-index を持ち得ない」という彼らの主張が正しいかどうかであり、さらに、「D-index を持たざるを得ない」ということで何を意味しているかである。

もちろん、限られた紙面でこの問題を扱うのはかなり困難である。なぜなら、本論文の先行研究の紹介においてすでに指摘してきたように、*deictic*・*anaphoric* という表現が使われる場合、研究者によってそれが意味するところはさまざまに異なっており、しかも Hoji たちの論文には *anaphora* という表現はほとんど登場しないからである。したがって、以下の問題指摘も決して十全なものではないということを一応確認しておきたい。

ではいよいよ本題に入るが、久野も黒田も、久野の挙げる次の例を *anaphora* と認めている。

- (1A)' 僕の友達に山田という人がいるんですが、{この男/その男}はなかなかの理論家で
…
- (2 A) 昨日山田さんという人に会いました。{その人/*あの人}、道に迷っていたので、
助けてあげました。
- (3A) 昨日、山田さんにはじめて会いました。{あの人/*その人}随分変わった人ですね。

まずわれわれは、(1)'や(2)の *anaphora* 用法の存在を理由にして、Hoji たちの「アとコは D-index を持たざるを得ない」という主張が誤りだとは考えない。彼らはそのようなことを言っているのではない。また、黒田の洞察にしたがって「アは D-index を持たざるを得ない」ということを一応認めることにし、論点をコとソに絞ることにしよう。

さて、(1)'の例文に示されているように、コとソは共に有意味なかたちで使われ得る。そうであるならば、どうして「コは D-index を持たざるを得ない」のに対して「ソは D-index を持ち得ない」ということになるのであろうか。

これに対して Hoji たちは、(1)'(2)(3)の例はすべて *Coreference* の例であり、そこにおいて「D-index を持たざるを得ないか、持ち得ないか」という統語論的な相違は問題にはならず、むしろ、指示詞が（束縛変項であれ自由変項であれ）変項を指示し得るかどうかに依存するのだ、と主張するかもしれない。

そこで以下の例を考えてみよう。

- (15) もうすぐ長崎行きのバスが次々に来ますから、{それ/これ}に乗ってください。

この例で、指示詞は任意のバスを指示している（それゆえアは使えない）が、ソとコは共

に使用可能である。また、Ueyama が手がかりとする Evans の E-type pronoun の例は、

(16) Few congressmen admire Kennedy, and they are very junior.

であるが、これに倣って、以下のような日本語の例もつくることができる。

(17) 九大の言語学科の院生たちは酒好きであり、{その／この}院生たちは毎晩屋台に足を運ぶ

(17)において、コはソと同様に有意味な仕方で使用できる。それゆえ、統語論的に任意の変項を指示する、という点に関しては、「コは D-index を持たざるを得ないが、ソは D-index を持ち得ない」という彼らの主張は成り立たないように思える。

(二) ここで第二の問題点に移行することにしよう。

(10)' トヨタと日産が{そこ／*ここ}の子会社]を推薦した。

(11b) どの自動車会社も{その／*この}自動車会社の子会社]を推薦した

Hoji たちは、「ソが D-index を持ち得ない」というのは、ソが任意の変項を指示する、ということではなく、(10)'や(11b)から明らかのように、ソは「連動 (covariant) 読み」が可能である、ということであって、この場合コが非文になると主張するかもしれない。そして実際それはその通りである。コでは「連動読み」が不可能であり、これがソとコを分けているのであろう。

こうして、「アとコは D-index を持たざるを得ないが、ソは D-index を持ち得ない」、ということの意味を尋ねることにより、われわれは、その実質的な内容が「ソは連動読みができるが、アやコはできない」ということに帰着する、ということを引き止めることができた。しかし、ソは、「連動読みができる」ということだけでなく、任意の変項を指示する、という特性をコと共有し ((15), (17)), またコやアと Coreference という特性も共有している ((1)'(2)(3))。したがって、Hoji たちの、

- (9)
- a. コ-NP は D-index を持っていなければならない
 - b. ソ-NP は (少なくとも対象がその現場で visible でないなら) D-index を持てない
 - c. ア-NP は D-index を持っていなければならない

で主張されているような、ア・コ対ソの二元論的区別は成立していないのであり、「連動読

み」以外のソの（言わば）「D-index」の機能をどう説明するか、という課題が残されることになると思われる。

たしかに、ソという表現はコと異なり、「連動読み」ができる。しかし、そこを強調しすぎることには大きな問題があるように思われる。Hoji たちの(10)などに対応する、Evans の例文を挙げてみよう。

(18) Every man loves his mother.

ここで his は bound pronoun であり、対象を指示する機能を持たない。Evans はこのことをあらかず指標として、量化表現を No に置き換えることを提案している。事実、(18)の Every を No に置き換えても、非文にならない。

(18)' No man loves his mother.

つまり、指示する対象が存在しなくとも(18)'は意味をなすのである。

一方これとは対照的に、E-type pronoun を含む文は量化表現を No に置き換えると意味をなさなくなってしまう。

(16) Few congressmen admire Kennedy, and they are very junior.

(16)' *No congressmen admire Kennedy, and they are very junior.

これは、E-type pronoun が指示表現、つまり、対象が存在しそれを指示することを本来の機能とする指示表現であることに起因している。

よって、Evans が bound pronoun（束縛変項としての代名詞）と E-type pronoun をはっきり区別した理由の一つは、後者が指示表現であるのに対して前者はそうではない、ということにあることが分かる。

さて、ソはコやアと異なり、(10)などの例に示されている通り、束縛変項として「連動読み」を出すことが可能である。しかしこのことは、この場合のソは指示のはたらきをしていないということを表している。この束縛変項としてのソは、『自分』という表現によって置き換えることが可能であるが、E-type pronoun に対応する(15)や(17)におけるソやコを『自分』にすることはできない。

上のようなわれわれの理解が正しいとしたら、Hoji たちの「D-index を持ち得ない」ソの用法、つまり「連動読み」の、量化表現によって束縛される変項としてのソの用法は、指示詞としてのソの用法ではないことになる。したがって、(9)のような「アとコは D-index を持たざるを得ないが、ソは D-index を持ち得ない」という、統語的な規定に指示詞コソア

の基礎的特性を求めることはできないように思われる。

ここでもう少し、問題提起というかたちでソの機能を考えてみよう。

(19) どの自動車会社もそこの弁護士を推薦した。

この例における「そこ」は、「連動読み」を成立させることができる。われわれは、この場合の「そこ」は、「自分の会社」という意味であり、これは指示詞ではないことを指摘した。

しかし(26)を次のように変形してみると、

(20) 都内には A 弁護士事務所があり、どの自動車会社もそこの弁護士を推薦した。

「そこ」は指示詞として「A 弁護士事務所」を指示することができる。すなわち、ここにおいては、「連動読み」よりも指示詞としての機能が優先されるのである。このことは、「連動読み」というソの機能（つまり、D-index を持ち得ない、という機能）が、きわめて特殊なソの用法であることを示しているように思われる。

以上考えてきたように、「連動読み」になっているときのソは指示表現ではない。したがって、このような用法—すなわち指示詞が指示表現でないような用法—ばかりに着目して、他の指示詞（コやア）との差異を述べることにはどれだけの意義があるか、と問わざるを得ない。

3.2. 提案と今後の課題

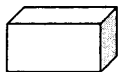
Hoji たちは、non-deictic use から指示詞の ‘formal properties’ を取り出そうとしており、deictic use は派生的なものとして位置付けている。しかし 3.1. で指摘したように、われわれはこのようなアプローチは成り立たないと考えている。そこで本節では、われわれが取る立場、すなわち、指示の問題は言語行為及び語用論の問題であるということを基本認識とし、指示詞の基本構造を説明する理論として三上の説を擁護する、という立場を提示することによって今後の研究の方向づけをすることにしたい。

だがその前に、われわれは、non-deictic という消極的な用語ではなく、anaphora（前方照応）という概念を指示詞の機能として積極的に認め、Coreference というものはやはり anaphora の一種である、ということ強調しておきたい。先行詞がある以上、これを単に non-deictic と呼んでしまうのはまずいと考えるからである。したがって、指示詞に関して、われわれは、「照応」と「直示」という二つの指示のあり方を認める。

そもそも、照応 (anaphora) とは、言語と言語の間の関係付け、もしくは言語表現が別の言語表現に依存すること（依存して対象に届くこと）を言い、直示 (deixis) は言語と対象

との間の関係を問題とする。Evans はこのことを踏まえ、以下の二つの表記を用いた。

- i) $t \uparrow$: 先行詞を必要とせず独立して世界の対象の指示をなす代名詞
- ii) $\leftarrow t$: 世界の対象を指示するために先行詞に指示的に依存する代名詞

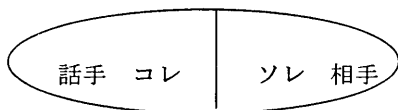


- i) $t \uparrow$
- ii) antecedent ... $\leftarrow t$

このように、対象指示の基本構造が根本的に異なる、二つの指示のあり方—照応と直示—がある、ということを押さえておくのは重要である。

さて、その上でわれわれは、指示の問題は言語行為及び語用論の問題であるということをも基本認識としたい。したがって、指示詞が指示表現として機能するところ—直示用法—でコソアの区別をつけることを重要視する。この立場に立つ三上の洞察をもう一度記しておこう。

①楕円的対立



②円の対立



このように三上は、指示詞の deictic use に対して上の二つの図式を示し、非常に示唆に富む洞察を与えているが、anaphoric use に対しては、「①から②へ」という方向に向かう際に領域を没収されたソが anaphora を受け持つようになると単純に考えていた。しかしその後、この指示詞の anaphoric use に関して、久野が「話し手・聞き手の共通知識」を、次いで黒田が「直接的知識・概念的知識」を提示することにより、anaphora の議論はより充実したものとなっていった。だが、久野、黒田の anaphoric use に関する洞察と、上の三上の deictic use に関する洞察がどのように結びついていくのかという点の解明については、今後の課題とせざるを得ない。ただしこの問題を扱う際、われわれはやはり、直示から照応へと向かう行き方をもっとも素朴であり望ましいものとする立場を取りたいと考える。

References

- Evans, G. (1980), "Pronouns," *Linguistic Inquiry*, 11:2, pp.337-362
- Hoji, Kinsui, Takubo and Ueyama. (2000a) "Demonstratives, Bound Variables and Reconstruction Effects," to appear in the proceedings of the GLOW Conference at Nanzan University, 1999.
- Hoji, Kinsui, Takubo and Ueyama. (2000b) "The Demonstratives in Modern Japanese," ms.
- 金水敏 (1998), 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」, 自然言語処理学会
- 金水敏・田窪行則 (1990), 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」, 『認知科学の発展』第3巻, 講談社サイエンティフィク, pp.85-116
- 金水敏・田窪行則 (1992), 「日本語指示詞研究史から／へ」, 金水敏・田窪行則(編)(1992), 『日本語研究資料集 1(7)－指示詞－』, ひつじ書房, pp.151-192
- 金水敏・今仁生美 (2000), 『現代言語学入門 4 意味と文脈』, 岩波書店
- Kuno, S. (1973a), "The Anaphoric Use of *Kore*, *Sore*, and *Are*," *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, Mass, pp.282-290
- 久野暉 (1973b), 「コ・ソ・ア」, 『日本文法研究』, 大修館書店, pp.185-190
- 黒田成幸 (1979), 「(コ)・ソ・アについて」, 『英語と日本語と－林栄一教授還暦記念論文集』, くろしお出版
- 三上章 (1970), 「コソアド抄」, 『文法小論集』, くろしお出版, pp.145-154
- 佐久間鼎 (1951), 「指示の場と指す語－『人代名詞』と『こそあど』－」, 『現代日本語の表現と語法(改訂版)』, 厚生閣, pp.2-43 (1983, くろしお出版より復刊)
- 田窪行則・金水敏 (1996), 「複数の心的要素による談話管理」, 『認知科学』3(3), 認知科学会, pp.59-74
- Ueyama, A. (1998), "Two Types of Dependency," Ph. D. dissertation, University of South California

